
ヤン・ファン・エイク作《ロランの聖母》について
—下絵の変更に関する考察を中心に—

本発表は、ブルゴーニュ公国のジャンスリエ、ニコラ・ロラン (c. 1376-1462) が注文したヤン・ファン・エイク (c. 1390-1441) 作《ロランの聖母》(パリ、ルーヴル美術館) の下絵変更の理由を考察する。従来の研究では、ローゼン＝ルンゲによる画中の銘文の詳細な検討以来、図像学的分析が中心であった。一方、ロレンツらは赤外線レフレクトグラフィーを用いて下絵を調査し、変更点を指摘した。そこで特に着目されるのは、下絵において寄進者の腰部分に描かれている、いわば小物入れである巾着状のオーモニエールの消去である。現状では、下絵のオーモニエールに繋がるように寄進者のベルトに結ばれた紐が描かれ、紐の先端は衣に隠されてそれを隠すかのように見える。この消去は寄進者がどのように自らを見せたがっていたかを理解する手掛かりでありながら、あまり着目されず、消去の理由は示唆に留まっている。本発表はこの理由の検討と新たな作品解釈に結び付く視点の提示を目的とする。本発表の意義は、1) 消去の理由を消去の経緯も含めて検討する点、2) 従来殆ど考察されていないオーモニエールの機能の検討から、本作品と煉獄との関連を示す点にある。

本発表は以下の通りである。まず、先行研究で本作品の図像理解の要とされる先述の銘文が決定的な根拠にならないことを他の作品と比較して示す。次に、下絵の変更に至る経緯を先行する図像への依拠から考察する。特に、他のロランの図像や同時代の素描に着目し、本作品のロランの図像にプロトタイプが存在した可能性を示唆する。その結果、オーモニエールは先行する図像を踏襲し、かつ注文主の要請に応じるため下絵の細部の厳密な決定を避けたため描かれたと結論づける。以上を前提に、オーモニエールの機能を再検討する。ポーリューらによる文書史料中心の考察は図像との結び付きが曖昧なため、図像資料を中心に扱う。ミニアチュールの図像等との比較から下絵のオーモニエールは国璽入れであり、かつ財布や富のイメージも喚起したと指摘する。そして、従来設置場所とされてきたノートル＝ダム・デュ・シャテル教会へのロランのミサ寄進文書中の「魂の浄化のために」という文言に着目する。ロランのボヌー施療院の設立における文言とこの文言を比べ、本作品と煉獄の関係を強調する。その結果、富と国璽入れ、双方の象徴としてのオーモニエールの消去の理由として煉獄からの救済という意図を指摘する。一方、上述の隠されたような消去にはオーモニエールを暗示し、自らの栄達を誇示する意図があると解釈し、この消去が煉獄からの救済と自身の出世の誇示の妥協案であるという仮説を提示する。その結果、注文主が公の視線を意識した環境での設置を意図したこと、従来の図像解釈とも一部合致することを確認する。